

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00484

研究課題名（和文）ロシアの亡命思想家と戦間期の西欧思想

研究課題名（英文）Russian Philosophy in Exile and Western philosophy in interwar period

研究代表者

北見 諭（Satoshi, Kitami）

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：00298118

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：我々は、ロシア亡命思想の全体像を明らかにした上で、主な思想家の亡命期の思想に焦点を当てた研究を行ったが、その中で特に成果として挙げられるのは、シェストフの著書『キルケゴールと実存哲学』をもとに、キルケゴールの思想の洗礼を受けた戦間期のドイツ思想とキルケゴールを知らなかった第一次大戦期のロシアの宗教思想に、それにもかかわらず同じような志向が見出されることを明らかにする手がかりを得たことである。その志向は、簡単に言えば、既存の秩序を虚妄なものと見なし、その秩序の彼岸に想定された真の世界へと超出しようとする志向である。しかし、いま述べたことを実証的に明らかにする作業は今後の課題となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

我々は以前、20世紀初頭のロシアの宗教思想の諸問題を当時の帝国主義的な世界状況との関連で検討したが、同じ時代状況はロシア以外の文化圏の哲学や文学や芸術にも反映しているはずだという予測を立てていた。今回の研究はそうした予測に基づき、ドイツやフランスに亡命したロシア人哲学者の思想と西欧の同時代の思想の関係を手掛かりに、哲学思想の同時代性を明らかにしようとする試みであった。その結果、我々はシェストフのキルケゴール論を手掛かりにして第一次世界大戦期のロシア思想とワイマール期のドイツ思想を一つのパースペクティブにおいて見る可能性に気が付いた。このことは我々の比較思想的な研究にとってきわめて重要である。

研究成果の概要（英文）：After clarifying the overall picture of Russian thought in exile, we conducted research, focusing on the thoughts of major thinkers. Now we think that by referring Shestov's book "Kierkegaard and Existential Philosophy", we can show that German thought in the interwar period, which was influenced by Kierkegaard's thought, and Russian religious thought during the First World War, which never met Kierkegaard's thought, nevertheless, have similar desires, as if the latter was also influenced by Kierkegaard's thought. Specifically, it is desire to see the existing order as a delusion and to transcend to the true world assumed beyond that order. But what we have got is only idea. The task of clarifying convincingly what has just been said, will be a future task.

研究分野：ロシア思想史

キーワード：ロシア思想 ロシア哲学 ロシア宗教哲学ルネサンス

## 1. 研究開始当初の背景

本研究以前に、我々は帝国主義から第一次世界大戦に至る時期のロシアの宗教思想の研究を、科研費の助成を受けつつ、10年間にわたって行ってきた。その研究においては大まかに分けて二つのことが問題になっていた。一つは、ロシアの宗教思想家たちによる西欧の生の哲学的な思想(ニーチェ、ベルクソン、プラグマティズムなど)の受容という問題であり、もう一つは、生の哲学を受容したロシアの思想家たちが第一次世界大戦という世界的な出来事をどのように理解していたのかという問題である。

なぜ生の哲学を受容した思想家たちの世界戦争論が問題になるのかということ、彼らが世界戦争を生の哲学的な出来事として理解しているからである。もう少し説明的に言えば、彼らはその戦争を表層の人間的な形式が破壊され、その形式に抑圧されていた非人間的な生命の力が深層からあふれ出してくるような出来事としてイメージしている。彼らにとっては、表層の人間的な形式は西欧のイメージと重なり、深層の非合理的な生命の力はロシアのイメージと重なる。彼らにとって世界戦争は、植民地主義の過程で世界の全表面に張り巡らされた西欧的、近代的な価値が破壊されていく出来事であり、そのようにして西欧的なもの、近代的なものが破壊されることで、その背後からそれに抑圧されていたロシア的なもの、野蛮ではあるが、人工的な形式によって歪められていないありのままの自然な生命の力がよみがえってくるような出来事なのである。彼らは世界戦争をそのようなものとして理解し、そこにある種の希望を見出すことになる。

今回の亡命思想に関する研究は、ロシアの宗教思想に関する上述のような研究をさらに新たな方向に広げてみようとする試みとして構想されたものである。我々が前回の研究で問題にしようとしていたのは、帝国主義から世界戦争に至る時代、近代の歴史が大きな曲がり角を回り始めた時代に、そうした危機的な時代状況が、ナショナルな欲望を持つロシアの思想家たちにどのように理解され、その理解が彼らの思考をどのような方向に導いていったのかということだった。そこには多分にロシア的な問題が関わっている。しかし同時に、帝国主義から世界戦争に至る時代の危機的な状況は、ロシアにのみ固有のものではなく世界的なものであり、世界の様々な地域の思想にそれぞれの地政学的な状況を反映して様々なやり方で反映しているはずである。同じ時代状況が同時代の西欧の思想にはどのような形で反映し、西欧の思想をどのように動かしているのか、今回の研究の構想の背景にあったのはそうした問いである。

そうした問題を考える上で手掛かりになるかもしれないと考えたのが、ロシアの亡命思想である。ロシア革命後、多くのロシアの思想家がベルリンやパリを中心に、東欧も含めたヨーロッパ各地に亡命するが、そうしたロシアの亡命思想家たちが同時代の西欧思想をどのように理解し、またどのように批判しているのかといったことを検討することで、ロシア思想のケースとの比較で西欧の思想に対する危機的な時代状況の反映の仕方を知る手掛かりが得られるのではないと考えた。そういう発想が、今回の研究の開始当初、その背景にあったものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、第一には、ロシアの思想家たちの亡命後の思想を亡命前の思想との関連を念頭に置きつつ、その新たな展開として明らかにすることである。上で述べたように、我々は過去の研究で20世紀初頭のロシアの思想家たちによる生の哲学の受容を、その背景にある時代状況との関連で検討した。それは西欧的、近代的な価値が世界の全表面を覆い尽くすに至った時代であるが、同時に、その価値が世界戦争によって破壊された時代でもある。ロシアの思想家たちはそうした時代にある種の希望を見出していた。世界の表面を覆った西欧的な価値を戦争が破壊することで、それに抑圧されていたロシア的な価値が深層から表層へと呼び起こされると考えたからである。しかし、そうしたユートピア的な希望はロシア革命によって砕かれる。そのあと始まる彼らの亡命時代は、彼らにとってはユートピアが喪失した後の時代である。そうした時代の彼らの思想が、同じように敗戦によって希望を失ったワイマール時代のドイツ思想をはじめ、当時の西欧思想との間にどのような共鳴関係を作り出すのかを、ベルジャーエフ、フランク、シェストフという三人の亡命ロシア思想家の亡命時代の思想に即して明らかにすることが本研究の目的の一つであった。

それと並んでもう一つ、我々がロシアの亡命思想を扱って目的としたのは、上でも述べたとおり、ロシアの思想家たちの亡命期の思想に着目することで、ロシアの思想を中心に、第一次世界大戦前後のさまざまな地域の思想の同時代性のようなものを明らかにするための手掛かりを得ることだった。上でも指摘したとおり、ロシアの宗教思想家たちの亡命前の思想には、帝国主義から世界戦争に至る世界史の大きな転換期の危機的な時代状況が強く反映しているように思える。そうした時代状況の影響は、それが世界史の大きな転換期であったことを考えれば、ロシアの思想家にとどまらず、さまざまな地域や文化圏の思想家にも何らかの形で現れていることが予想される。我々はそうした思想の同時代性のようなものを明らかにする手掛かりを、今回の研究においては、ロシアの亡命思想家たちの思想と同時代の西欧思想との関わりの中に見出せるのではないかと期待し、この研究を計画した。それがこの研究の第二の目的となる。

### 3. 研究の方法

我々が本研究で取り上げるロシアの亡命思想家は、ベルジャーエフ、フランク、シェストフの三人であるが、彼らの思想を検討するのに先立ち、まずは彼らも含めたロシアの亡命思想の全体像を捉えることを試みた。亡命思想家として重要であると思われる思想家たちの基本情報を調査し、ロシアの亡命思想の空間的な配置や時間的な変動の全体像を俯瞰する作業を行った。

そうした予備的な作業を済ませた後、本研究の主要な対象である三人の思想家の亡命期の思想の研究に取り掛かったが、ベルジャーエフとフランクに関しては、その亡命前の思想はすでに前回の研究で明らかにしていたため、今回はその亡命前の思想との比較で、彼らの亡命期の思想に現れた変化を明らかにすることを目的に、彼らの亡命期の著書や論文を読むというやり方で研究を進めた。その際、彼らが同時代の西欧思想に触れている個所には特に注意を向けた。

また、上述の二人に続く三番目の思想家であるシェストフについては、前回の研究では研究対象としていなかったため、今回の研究で亡命期の思想だけではなく、亡命前の思想も含め、彼の著作全体を解読し、その思想の全体像を捉えるように試みた。この場合にも、亡命前と亡命後の思想の変化を明らかにするという意図をもって研究を進めた。

以上のように、我々の研究方法には特筆するような特殊性はない。上述の目的を実現するため、研究対象となる思想家のテキストを熟読するというオーソドックスな方法で研究を進めた。

### 4. 研究成果

我々はこの研究によって得た成果として以下のようなものを挙げることができる。

一つはロシアの亡命思想の全体像に関する研究である。亡命思想の全体像に関する研究は、研究対象となる思想家たちの思想を正確に理解するための予備的な作業として行ったものであるが、亡命思想全体を俯瞰的に見渡すような先行研究が見当たらなかったため、基本的な情報を調査しただけではあるものの、全体を視野に収め、個々の思想家の配置や動きを把握できたことは、今回の研究を遂行するにあたって様々な示唆を与えてくれる有益な予備作業になった。とりわけ、生年をもとに亡命思想家を三つの世代に分けたとき、我々が今回研究対象とした70年代生まれを中心とする世代と、90年代生まれを中心とする世代、言い換えれば、亡命前にすでに思想家としての地位を確立していた人々と、亡命後に思想家としての活動を開始した人々の間にはっきりとした傾向の違いがあること、具体的に言えば、前者は歴史的、空間的なものを軽視し、表層と深層を軸とする認識論的、存在論的な思考を重視する傾向があるのに対して、後者の世代はそうした思考を形而上学的なものとして批判し、歴史的、空間的に思考しようとする傾向があるという違いがあることに気づいたことは、今後亡命思想を研究する上で有益な発見になったと考える。

二つ目に、我々は今回の研究で、前回の研究で研究対象として取り上げたベルジャーエフとフランクの亡命期の思想を取り上げた。前回の研究では主に亡命前の思想を研究したので、その研究を基盤に今回は亡命期の思想を検討するためである。しかし、残念ながら、彼らの思想については、亡命期の思想も亡命前の思想とそれほど大きく変わっていないという結論しか得ることができなかった。彼らはいずれも亡命前にはマルクス主義から観念論へ、そして観念論から宗教哲学へというやり方でその思想を大きく変化させた思想家であるが、亡命を経験することでその思想が大きく変わったようには思えなかった。

亡命後に自己の立場を実存主義と規定するようになったベルジャーエフには、ハイデガーやヤスパースなどについての批判的な言及がいくつかの著作に見られるし、ピンスワンガーと交友関係にあったフランクも彼との往復書簡の中で何度かハイデガーについて言及しているので、こうしたところを糸口として彼らの思想と同時代のドイツ思想の関係について検討することも可能であるかもしれないが、今回は、ベルジャーエフやフランクがハイデガーをはじめとする同時代の西欧思想について深く検討しているわけではないこと、また我々の方でも彼らの個別研究に割り当てられる時間が限られていたこともあり、この点について深く取り上げることはしなかった。これについては今後の課題としたい。

三つめは今回の研究で初めて取り上げたシェストフの思想についてであるが、今回の研究で亡命前の思想から亡命後の思想まで、彼の主要な著作を一通り通読し、彼の思想の中心的な問題を捉えることができたと考える。シェストフ自身は、自分は初期から一貫して一つの同じ問題を考えてきたと言っているし、一般的にもそのように考えられているが、我々が彼の主要著作を通読することで感じたのは、彼の思想には亡命前と亡命後でいくぶん変化が生じているのではないかということだった。そして、その変化を生み出した要因はキルケゴールの思想との出会いだったのではないかと我々は考えている。我々はそうした想定に基づき、シェストフの亡命期の思想を、そのキルケゴール論を中心に検討した。

シェストフのキルケゴール論は『キルケゴールの実存哲学』と名付けられているが、実際にその著作を読むと、単独者や主体性や個的な存在者のような実存主義的なテーマがほとんど現れない。シェストフがこの著作で問題にしているのは、倫理的なものから宗教的なものへの飛躍という事態、キルケゴールに即して言えば、「信仰の騎士」であるアブラハムが行う自らの最愛の息子イサクを神のために生贄として捧げるという「信仰の運動」である。である。シェストフは、そうした飛躍を行わず、論理体系や倫理体系の中を循環し続ける思想を「思弁哲学」と呼ぶのに対して、そうした循環を断ち切って体系の外部に跳躍しようとする思想を「実存哲学」と呼んでいる。キルケゴールはそうした跳躍を問題にする際に跳躍

の主体である単独者を重視するが、シェストフはそうした主体にではなく、跳躍それ自体、そして跳躍によって体系の外部で出会われるはずのもの、彼が「無限の可能性」としてイメージしているものを重視する。

このように、シェストフが実存哲学という名のもとに考えていることは、実存という言葉で一般的に考えられていることと必ずしも一致しない。しかし、シェストフによる「実存哲学」のこうした独特の理解を念頭に置きつつ振り返ってみると、循環をもたらす閉じた体系からその外部へ超出しようとする欲求は、キルケゴールの影響が色濃く現れる戦間期の実存主義的なドイツ思想にもさまざまなところに見出されるように思える。キルケゴールに発する実存主義の影響は、主体をめぐる思想と体系の超出をめぐる思想という二つの流れを生み出していったと考えることもできるかもしれない。

そして我々にとって興味深いのは、閉じた体系の外部へ超出しようとする志向が、世界の表面を覆い尽くした西欧的な価値を破壊してその外部へ出ようとする戦時期のロシア思想の志向と重なり合ってくることである。キルケゴールを知らなかったロシア思想にキルケゴールの影響を受けたドイツ思想との重なりが見られることは、思想の同時代性を明らかにするための一つの手がかりになるのではないかと思われる。ドイツの思想はキルケゴールの影響下に外部へ超出しようとする志向に捕らえられたのではなく、外部へ超出しようとする志向に捕らえられていたからキルケゴールの圧倒的な影響を受けたのかもしれないからである。いま述べたようなことはまだ仮説の域を出ない。しかし、前回の研究でロシア思想に関して明らかにしたことを、ロシア思想の範囲を超えて世界的な思想の問題として捉える手がかりを得たことは、我々の今後の研究にとってきわめて大きな成果であったと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 北見論	4. 巻 66号
2. 論文標題 生成する世界とメシア的な主体：ベルジャーエフの世界戦争論をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 スラヴ研究	6. 最初と最後の頁 55-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 北見論	4. 巻 71巻2号
2. 論文標題 ベルジャーエフの第一次世界大戦期の思想における構造と主体（前編）：生成する生と静態化するイデオロギー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸外大論叢	6. 最初と最後の頁 89-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 北見論	4. 巻 71巻2号
2. 論文標題 ベルジャーエフの第一次世界大戦期の思想における構造と主体（後編）：循環する生と超越的な主体	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸外大論叢	6. 最初と最後の頁 125-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 貝澤哉・杉浦修一・下里敏行編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 335
3. 書名 超越性と生との接続	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------